

「使徒言行録」

2023年12月20日

テオフィロ様、私は先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指示を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。（使徒1：1～2）

本書は表題が付いていなかったが、パウロが使徒と認められるに至った2世紀の後半から「使徒言行録」と言われるようになった。本書の著者は、伝統的に「ルカ」とされていた。ルカは、パウロ書簡の中に、「愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています。（コロサイ4：14）」、「ルカだけが私のところにいます。（Ⅱテモテ4：11）」、「私の協力者たち、マルコ、アリストアルコ、デマス、ルカからもよろしくとのことです。（フィレモン24）」と書かれているように、パウロの親しい同伴者であった。しかし、本書の著者がルカであるとは見なすことには無理がある。本書の著者は、パウロ書簡を読んでいないと思われる。パウロは徹底して、信仰義認論の神学を展開しているが、本書の記述には、その視点がない。また、エルサレムの使徒会議での合意事項は、パウロが書いたガラテヤ書と本書では異なっている。異端に関しても時代的差異があり、本書の著者をルカとは考え難い。誰が著者であるかは、特定できないが、異邦人キリスト者を中心とする共同体の人で、書かれたのは90年代ではないかと推測されている。

ルカ福音書と使徒言行録の著者は同一人物であろう。第一巻のルカ福音書は「敬愛するテオフィロ様」に献呈すると書いてある。第二巻目の本書も「テオフィロ様」と書き出し、彼に献呈している。テオフィロという人物がどんな人かは分からない。両書の著者は、著名人であったと思えるテオフィロに献呈して、格式を高め、読者に広く読んでもらうようにしたのではないか。私は、聖書の表記に従い、著者をルカと表すことにする。

ルカは「旧約聖書」を知り、「イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指示を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました」と書き始めているように、イエス語録、マルコ福音書、ルカ固有の資料などを用いて、「主イエスの時代」を克明に記述している。更に、使徒言行録で、ペトロ、パウロを中心に、神の国がエルサレムから異教世界にまで宣教されていく「使徒の時代」を描いている。ルカは、旧約で預言された救いが主イエスにおいて実現し、それを使徒たちが継承していく「神の救済史」という壮大な歴史観で捉えている。従って、ルカにはパウロ的な贖罪論、また、ヨハネ福音書的な先在するキリスト論や宇宙論的なキリスト論はなく、主イエスは、神の救済の器として用いられている。

ルカの特徴はエルサレム中心主義である。主イエスの復活はガリラヤではなく、エルサレムで起こる。十字架と復活、昇天、そして、聖霊降臨もエルサレムで起こる。従って、エルサレムの原始教会と結び合う会議と決定が正当と見なされている。

同時に、ルカはヘレニズム文化を取り入れた手法を用いている。それは「説教」「演説」がペトロ、ステファノ、パウロを始め、異教徒の演説も含め、24回も記されていることから、伺える。また、キリスト者への迫害の首謀者はユダヤ人であることを強調している。これらは、本書が書かれた目的は、異教世界への発信と見ることができよう。エルサレム教会とパウロの宣教団の和解をもたらしたエルサレムの使徒会議は、パウロの異邦人伝道を勢いづかせ、世界宣教への救済史的意義を強調する記念すべき会議であった。